未来志向で取り組む 選ばれる環境に必要なICT活用の視点
～ DXによる業務改善 ～

社会福祉法人 青森社会福祉振興団
理事長　中 山 辰 巳
令和7年度高齢者施設経営セミナー（福祉医療機構）

青森社会福祉振興団のあゆみ

１９７４年	・厚生省（現厚生労働省）より法人設立認可
１９７５年	・みちのく荘　開所（定員50名）
１９８５年	・QCサークル結成・改善活動開始
	・人事考課制度開始
	・財務・給与等IT化による管理
	・介護（排泄）サービスのIT化による管理（※河北新報記事）
１９８７年	・嚥下食（ゼリー食）開発
１９９３年	・契約制特別養護老人ホーム受託
	（厚生省 公的介護保険施設モデル事業）
２００３年	・福祉オンブズマンの設置
２００８年	・EPA第1陣インドネシア人介護福祉士候補者2名受け入れ

青森社会福祉振興団のあゆみ

２０１０年	・iPad発売と同時に管理職・係長に配布 ⇒ペーパーレス化の促進
２０１１年	・モバイルを使ったリアルタイムの介護データの記録化
２０１２年	・法人全事業所にてISO認証取得（ISO9001）
２０１３年	・天井走行リフトの導入
２０１４年	・真空フードセンター（HACCP対応型）開設 ・EPA第1陣ベトナム人介護福祉士候補者1名受け入れ ・ベトナム国立フエ医科薬科大学との介護人材育成協働事業（公益事業として日本で初めて事業認可） ➡社会人1年コース開校
２０１６年	・ICT見守りシステムの導入

青森社会福祉振興団のあゆみ

２０１８年	・勤務シフト自動作成ソフト「びっくりシフトさん」 開発
２０１９年	・国立フエ中央病院との介護人材育成協働事業及び高齢者施設の運営
	・ベトナム フエ中央病院 高齢者施設建設運営協働事業 合意
２０２０年	・安眠プロジェクト　結成
２０２２年	①　感染症対策 ②　災害対策 ③　介護ICT・ロボット ④　ICT調理システム に対応する特別養護老人ホームを仙台市に開設
２０２３年	・3月　日越介護医療セミナー開催
	・7月　日越協働運営による高齢者施設の開所
２０２４年	・4月　生産性向上委員会・生成AIによるケアプランプロジェクト発足
２０２５年	・2月　生成AIによるケアプラン作成稼働

青森社会福祉振興団・地域包括ネットワーク

みちのく議会

託児所

居宅介護支援事業

クリニック
（内科・消化器内科・
麻酔科）

在宅療養支援診療所

デイケアセンター

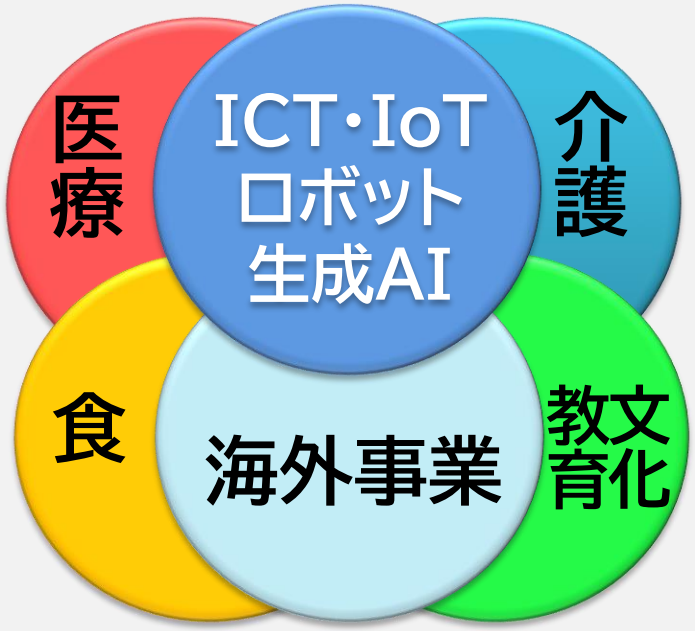
訪問看護ステーション

訪問リハビリステーション

真空調理フードセンター
（HACCP対応）

高齢者コンビニ

子ども食堂



みちのく社会福祉協同組合

ベトナム教育研修事業

ベトナム　フエ高齢者施設の建設

地域包括支援センター

特別養護老人ホーム

ショートステイ

グループホーム

認知症カフェ

ケアハウス

訪問介護

認知型デイサービス

仙台市
特別養護老人ホーム
まるめろ

まるめろ美術館

なぜ学ぶのか

なぜ基礎や理論を学ぶのか
なぜ研修が必要なのか

① 本当に必要な事や物がわかる

② 本当に必要としない事や物がわかる

③ 創意と工夫の手がかりやヒントがわかる

業務改善に向けて

～DX化の前にすべきこと～

① Quality Controlの歴史

・何の為に
・いつ　誰が
・欧米と日本の相違

② 業務改善の目的・目標

・自己啓発・相互啓発 ➡ 自らの成長につなげる
・QCストーリー ➡ 問題解決手順
・仕事の標準化 ➡ 標準書作成
・仕事を効果的かつ効率的に見える化 ➡ ①働きやすい職場づくり（週休3日制）
②給与アップ

業務改善に向けて

～ 経験から科学へ ～

③ 業務改善とは何か

- 身近で小さい仕事の改善
- 仕事で困っていることを発見
- 小さなサークル(少人数)で解決

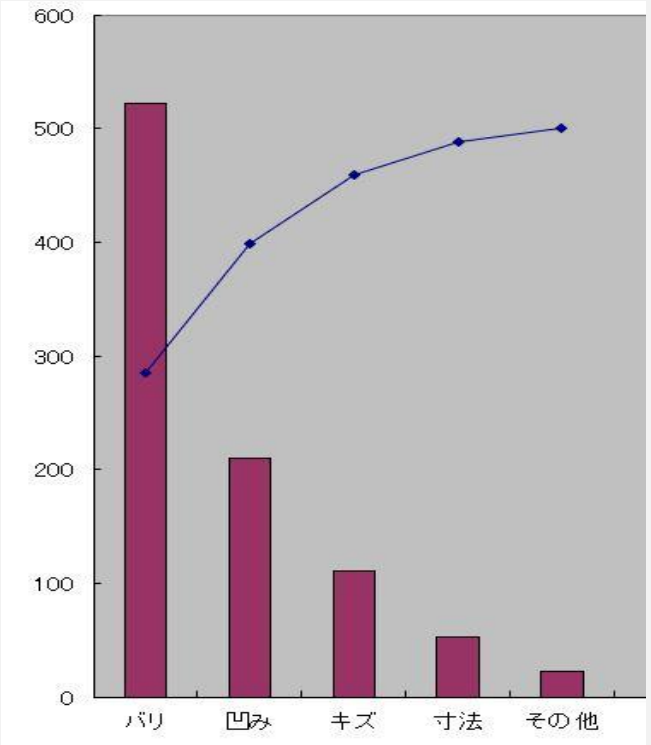
④ データに基づいた業務分析

- データ収集
- 数値化
- 科学的分析
- 品質管理手法を駆使
  （パレート図・特性要因図）

パレート分析

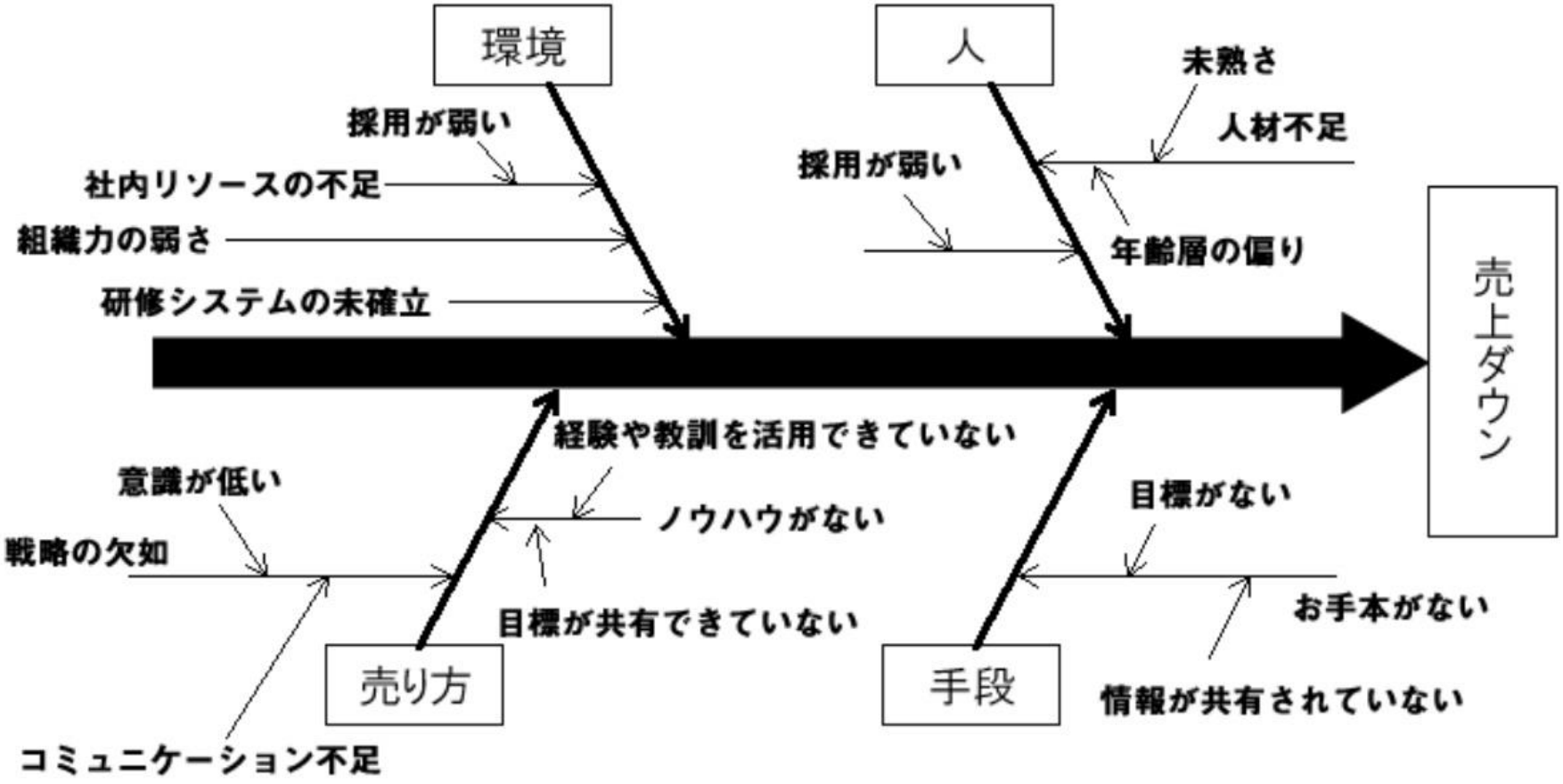
パレート図を使った分析のことで問題の大きさや順位がわかり、
全体の問題に対してどの程度に割合を占めているかが分かりやすくなる

不良内容	件数	構成比
バリ	522	56.9%
凹み	210	22.9%
キズ	111	12.1%
寸法	53	5.8%
その他	22	2.4%



- 表での数値では全体像が把握しにくい
- 問題の大きさや順位がわかりやすい

特性要因図


環境
人
売上ダウン
売り方
手段
採用が弱い
社内リソースの不足
組織力の弱さ
研修システムの未確立
未熟さ
人材不足
採用が弱い
年齢層の偏り
経験や教訓を活用できていない
意識が低い
ノウハウがない
戦略の欠如
目標がない
目標が共有できていない
お手本がない
情報が共有されていない
コミュニケーション不足

4Mとは

4つの要素を分析・改善していくことで
課題発見や問題解決を図ることができる

① Man（作業者・人）

② Machine（機械）

③ Material（材料）

④ Method（方法）

QCサイクル図

改善力向上・生産性向上

P:計画
D:実行
C:評価
A:対策・改善

歯止め・マニュアル(標準書)

河北新報（青森版）記事（1988年(昭和63)9月24日）

河北新報　昭和63年(1988年)9月24日（土曜日）　(20)

コンピューターで入所者のデータ把握

むつの特養ホームみちのく荘

時間ごとトイレ介助

イヤなおむつから解放

お年寄りをおむつから解放してあげようと、むつ市城ケ沢の特別養護老人ホームみちのく荘（中山久司園長）でコンピューターを使って入所者一人ひとりのパターンを分析、成果を上げている。おむつはボケを進行させることから、同ホームでは五十八年度からこの試みを始めたが、今では時間ごとに自力でできるお年寄りも出てくるなどこれまでの職員の苦労がようやく実ったようだ。

みちのく荘は現在、六十歳から九十四歳までの五十五人を収容している。すべて日常生活に常時介護が必要な人ばかり。この試みを始めるまでは、おむつを使い、一日八回定時に交換する方法を採ってきた。これを何とか変える手立てはないものかと検討した結果、一人ひとりのデータを取るのが先決と六十年十一月から、コンピューターに入力するデータの収集に取り掛かった。一人ひとりのおむつを三十分ごと、一日当たり三十一回点検するのが第一段階。この作業には十四人の寮母が当たったが、ある寮母は「二週間ぐらいでもう駄目だと思った」と言うほどきつかった。それでも作業は一年間続いた。

こうして得られたデータは同荘のオフコンに入れられ、これを基に、時間が来ると寮母がお年寄りを介助してトイレに連れて行く。季節、室温の変化でパターンが変わるので、データ集めは今も続けられており、二カ月ごとに見直している。

当初、時間と回数だけのデータだったが、今ではもっと詳細になり、ちょっとでも"異常"があればすぐ分かるようにまでなった。

中山園長は「人間、年を取っておむつをされるのは、ある種の屈辱感がある。それを外してあげるのは精神的にもいいのではないか」と話している。

「お年寄りに快適な生活を」と寮母の奮闘は続く

あすのこよみ

新25日（日）
旧8月15日

通日		269
月齢		13.9
日出		5.27
日入		17.30
月出		17.07
月入		4.18
（陸奥湾）		
満潮		2.23 15.02
干潮		8.45 21.16
（八戸港）		
満潮		2.13 15.12
干潮		8.50 21.04

※当該記事は河北新報社より許諾を得て使用しています。

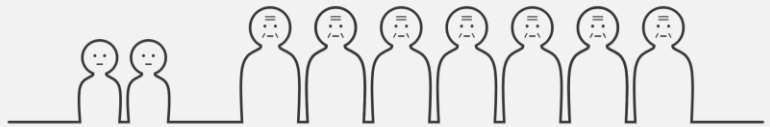
介護をとりまく現今の状況

① 介護・調理人材の枯渇

➡ グローバル化（多様性社会）

② 少子高齢化社会

➡ 要介護高齢者の激増



③ 介護保険財政のひっ迫

➡ 負担と給付の大幅な見直し

2025年・40年問題

団塊の世代とははじめての自己決定世代である

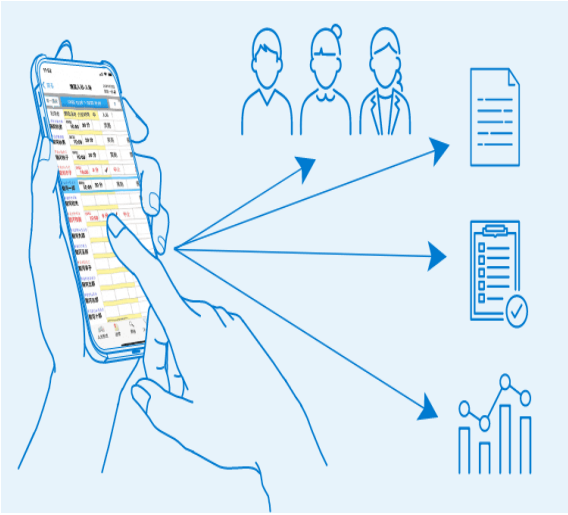
最大のミスマッチ時代

・最大のクレーマー世代へ
・介護人材Z世代へ
・移民新時代へ？

- ロボット・ICT導入の促進
- 新しい介護の創造
（日本人＋ICT＋外国人材）

現在導入している機器

介護記録システム



見守りセンサー（非接触型ICT機器）

労務管理システム（顔認証ICT機器）

ICT調理機器（再加熱機器）

そのねらい

① ICT機器を使った高品質の

新しい自立支援介護の創造

② 介護の労働生産性向上

➡ ゆとりのある介護の実現

③ 介護業務の標準化を進める

➡ シェアリングケア（30分単位）の導入

④ 働きやすい職場をつくる

➡ 働き方改革 → 外国人材との協働

取り組み①

自動記録データシステム

データベース化

取り組み②-1

労務管理システム

1 出退勤管理

顔認証システムによる
検温と出退勤管理

2 勤務シフト自動作成ソフト
（びっくりシフトさん）

・複雑な勤務シフトの自動作成
・各自のモバイルへ自動送信
・介護業務の見える化
・年次有給休暇管理

3 給与計算

・自動計算
・給与明細の電子化
各自のモバイルに送信

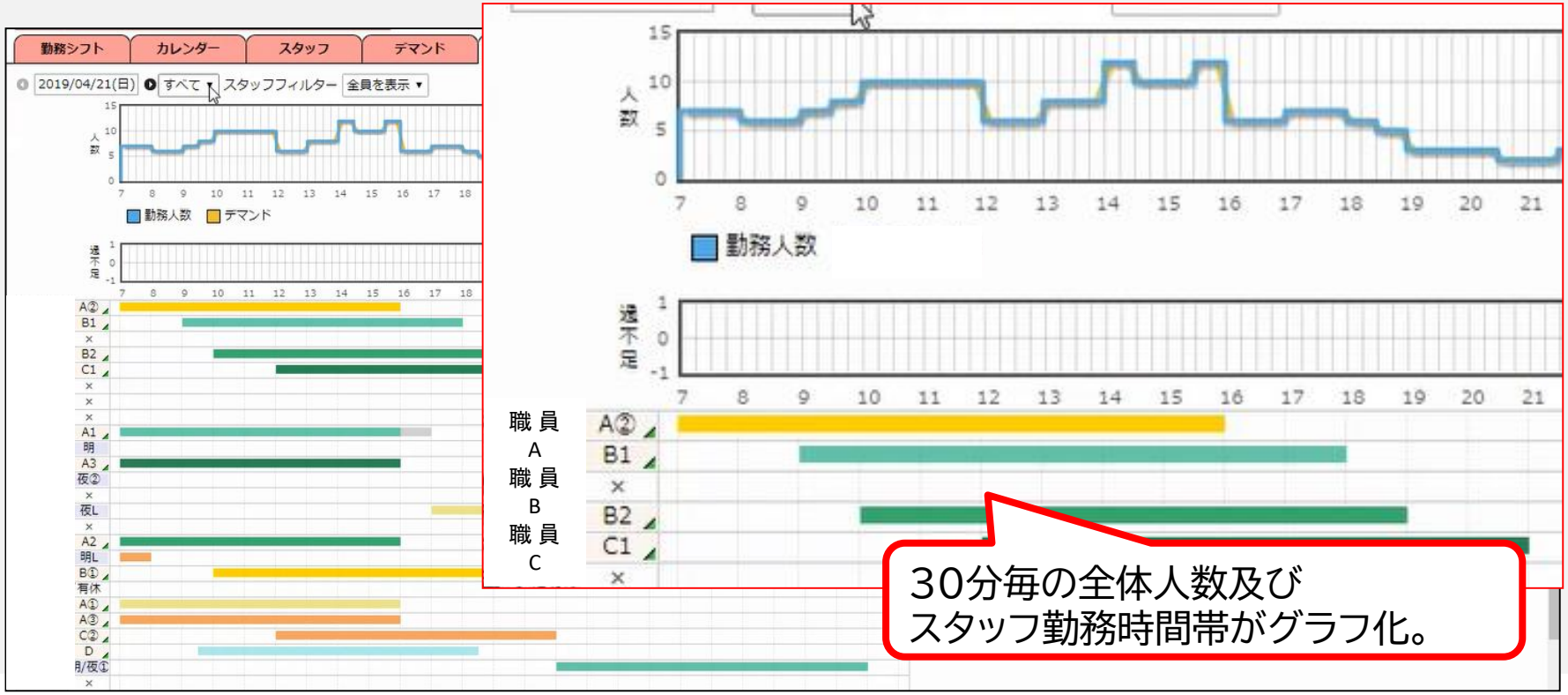
２０２３年５月
運用開始

取り組み②-2

びっくりシフトさん（デイリープラン）

完成シフトからの**時間帯毎の全体勤務人数**、出勤スタッフの**勤務時間帯をグラフ化**したもの。

※人員配置の**見える化** → 配置見直しのツール



介護の労働生産性向上

センサー系
ICT機器
労務管理
システム
シェアリングケア
モジュールケア
介護業務の
標準化
介護現場へのICT
導入の促進と
労働生産性向上
PDCAから
OODAへ
多職種連携
協同組合等法人の
連携と大規模化

生産性向上委員会

ケアプランAI化プロジェクト

利用者・家族との相談

ケアプランの作成

利用者の状態を入力

自動で作成

ケアプラン作成AI支援プロジェクト

生成AIとは

膨大なデータを学習し、文章や画像等を
まるで人間のように0から生成する**創造力**を持つ
人工知能（AI）の一種。

⇨ **生成AIの”創造力”を活かし介護の生産性を向上させたい。**

ケアプラン作成AI支援プロジェクト

生成AIの介護分野への適用

一人一人異なる生活に寄り添ったケアプランを
作成することは、ケアマネージャーにしか出来ない
創造的なタスク。

⇨ 生成AIと「ケアプラン作成」は”創造性”を鍵に
親和性が高い

ケアプラン作成AI支援プロジェクト

本プロジェクトのテーマ

生成AIによる「ケアプラン」作成の支援

ケアプラン作成AI支援プロジェクト

本プロジェクトの目標

・ケアプラン**作成時間の低減**

・**人に依らない**ケアプラン内容の確保

・生成AIによる**第三者的視点**の導入

⇨ いずれもケアプラン作成に係る生産性向上に資する目標

東奥日報 記事（2025年(令和7)4月2日）

2025年 令和7 4月2日（水）

東奥日報

最新ニュースは「Web東奥」へ

©東奥日報社2025

中小企業の名ドクター
経営安定・雇用安定・労働環境改善サポート
TMC
社会保険労務士法人
青森支店
017-718-4864

ピックアップ

町内5校集約 六戸学園開校 22

六戸町内の全5小中学校が統合され、9年制義務教育学校・六戸学園が開校した。全国的にも珍しい造3階建て校舎で記念式典が開かれ、関係者が子どもたちの豊かな学びや成長を願った。

首相、同日選「現在考えず」 3
新社会人が誓いの一歩 5、16
弘前で寺山生誕90年企画展 23
「やり切れない」と被害女性 23
AI活用、介護プラン作成 21

文化・小説 9
ライフ 10
スポーツ 11
13
地域 14
トゥデイ・明鏡 15
17
19

AIで最適介護プラン

むつの社会福祉法人

ケアマネ負担軽減へ導入

むつ市の社会福祉法人・青森社会福祉振興団は2月、独自に開発した生成AIを活用して介護保険のケアプラン（介護計画）を作成するシステムを導入した。全国的に不足しているケアマネジャー（介護支援専門員、通称ケアマネ）の業務負担を軽減し、多忙を解消することが目的。人工知能（AI）に蓄積されたデータを活用して利用者に最適な介護サービスを提供する狙いもある。県内では先進的な取り組みとして注目されている。（菊谷賢）

ケアプラン作成を支援する生成AIの画面。青森社会福祉振興団が今年2月から本格導入した（同振興団提供）

同振興団が運営する「みちのくケアプランセンター」（むつ市）で2月上旬、ベテランケアマネが初めて、生成AIを活用したケアプランの作成に取り組んだ。

高齢者の歩行の状態、自力で入浴や排せつをできるかどうか、認知症状があるかなどの項目を入力。「サービス計画書を作成してほしい」とプロンプト（指示）を打ち込んだ。

AIからは、利用者の生活の課題、長期の目標などが具体的に示され、ケアマネはその内容を吟味し、調整した上でケアプランを完成させた。作成時間は約1時間半で、全て人の手によって作成する方法の半分程度の時間で済んだ。「書類作成の効率化、省力化に役立つ」と手応えを語るケアマネ。ただ、「（AIからの提案は）利用者の活動目標や役割、生きがいなどの視点がなく、認知症や医療対応の表記で、不安定な部分もある。利用者の気持ちをよく聞き、的確なプロンプトを出すことが重要となる」と述べた。

同振興団は昨年4月に生成AIプロジェクトを立ち上げ、仙台事業部の関口雅詩さんらが中心となって介護分野に適した生成AIを開発、昨年9月に実用化し、今年2月から現場で本格運用を始めた。

生成AIによるケアプラン作成実績を検証したところ、新規の作成時間は1件当たり40～50分の短縮につながり、60％程度の生産性向上が確認された。

中山辰巳理事長は「利用者本人や家族に寄り添った介護サービスの提供へ向けて、人では思いつかない、柔軟で適切なケアをAIが提案できるのではないかと期待している」と語った。

高齢者福祉に詳しい工藤英明・県立保健大教授は「介護分野でのAIやICT（情報通信技術）活用は県内では導入率がまだまだ低く、目立った話を聞いていない」と話し、振興団の取り組みに関心を示した。

さらに「生成AIによるケアプラン作成は、間違った情報を入力すると、間違ったプランが提案されてしまうので、アセスメント力（利用者の状態や環境、価値観などを把握・分析する技術）が重要となる。AIが（プランを作成しても、最終的に利用者や家族に説明し同意を得るのはケアマネなので対人援助の能力は引き続き求められる」と語った。

生成AIを活用してケアプランを作成するケアマネジャー＝3月、むつ市のみちのくケアプランセンター（青森社会福祉振興団提供）

ケアプラン　高齢者らが介護保険サービスを利用する際に定める計画。心身の状態などに応じて、訪問介護や通所介護といったサービスの種類や、利用する頻度を定める。ほとんどの場合、ケアマネジャーらが、本人や家族の意向を踏まえ、内容を決める。

県内でもマネジャー不足

介護を必要とする人へ、適切な介護サービスを提供できるようにケアプラン（介護計画）を作成するケアマネジャー（ケアマネ）。社会福祉法人・青森社会福祉振興団（むつ市）が、介護現場で生成AIやICT（情報通信技術）を積極的に活用しようとしている背景には、ケアマネを含めた介護分野の職員が全体的に不足している現状がある。

厚生労働省の資料によると、2022年度の全国のケアマネの従事者数は18万3278人で、18年度の18万9754人より約650人減った。資格試験の合格者は10年ほど前まで、2万～3万人前後で推移していたが、18年度から2万人を切っている。

ケアマネ不足の理由として①業務量に見合った報酬体系になっていない②5年に一度の資格更新の負担が大きい③介護ニーズの高まりに、資格取得者が追いついていない―などが挙げられている。高齢化の加速によって、今後さらに介護ニーズが増すため、ケアマネの補充が不可欠とされている。

八戸市の特別養護老人ホーム蕪崎園の藤田章施設長は「ケアマネ不足の現象は八戸周辺でも同様にある。ケアマネの年齢が60歳以上の割合が多く、今後退職するケアマネの補充ができない状態が続くとケアマネジメント自体に支障が出てくる恐れがある」と指摘。AIの補助によって業務を省力化し、人でなければできない業務を手厚くすることは重要だと思う」と語った。（菊谷賢）

※当該記事は東奥日報社より許諾を得て使用しています。

ケアプラン作成AI支援プロジェクト

ICT担当職員 関口より

・AIケアプラン開発の経緯

・「五里霧中のプロジェクト」

・実際の画面のご紹介

ケアプラン作成AI支援プロジェクト

ケアプラン作成の流れ

介護記録ソフト

加工ツール

アセスメントデータ

基本情報
ADL

課題
要望

ケアプラン

① ツールへのデータ入力　介護記録ソフトのアセスメントデータをツールに入力する。

② データ加工　アセスメントデータを生成AIに読み取らせるために加工する。

生成AIの利用

③ データの読取り　利用者様のデータを生成AIに読み取らせる。

④ データの分析　データを生成AIに分析させ、利用者様の課題を抽出する。

⑤ ケアプラン作成　「援助の方針」や「目標」、「サービス内容」等を生成AIに作成させる。

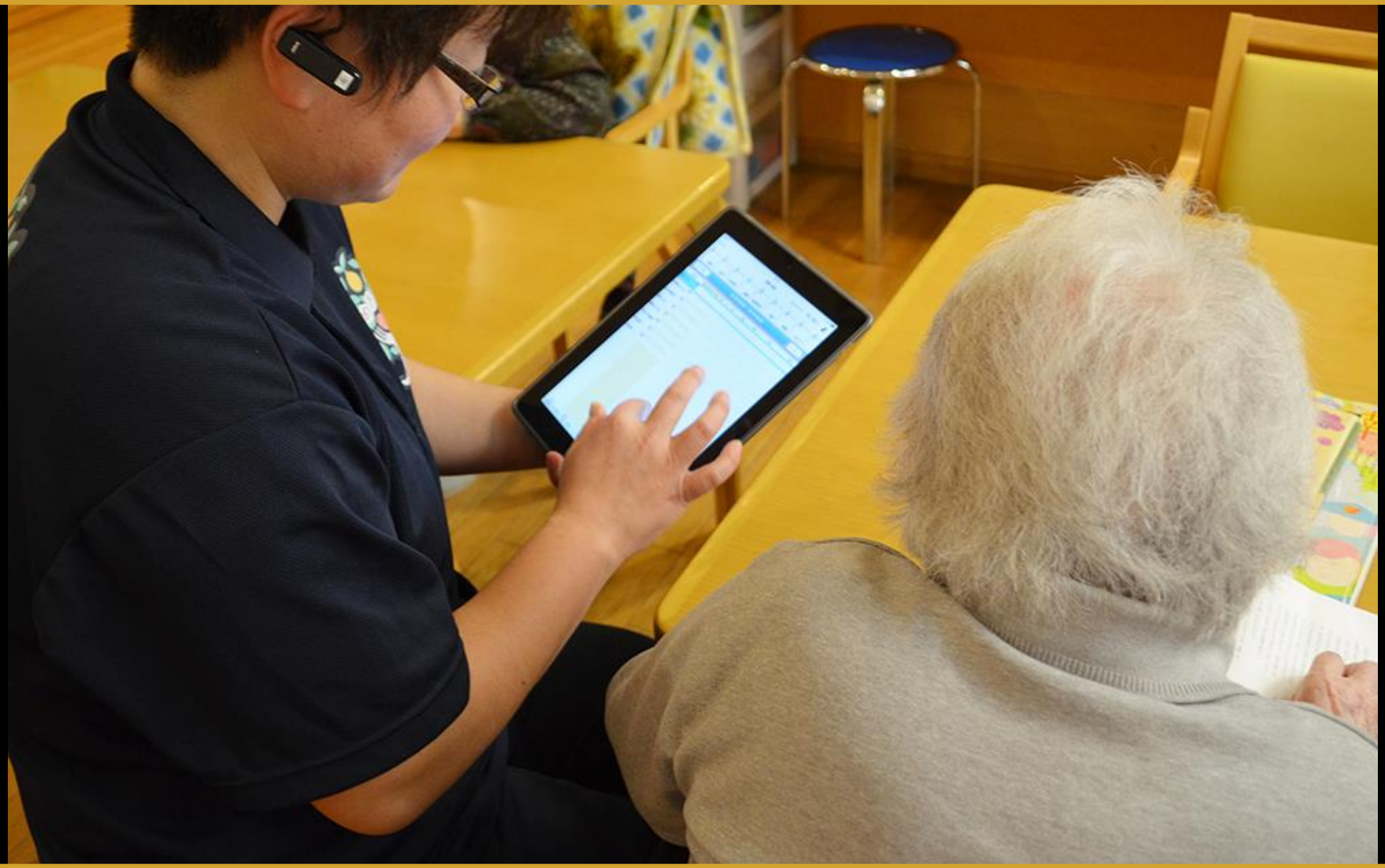
AIケアプラン作成画面（例）

写 真 集

2022年6月完成
仙台市太白区　特別養護老人ホームまるめろ（木造2階建て）

2022年6月完成
仙台市太白区　特別養護老人ホームまるめろ（木造2階建て）

記録モバイル

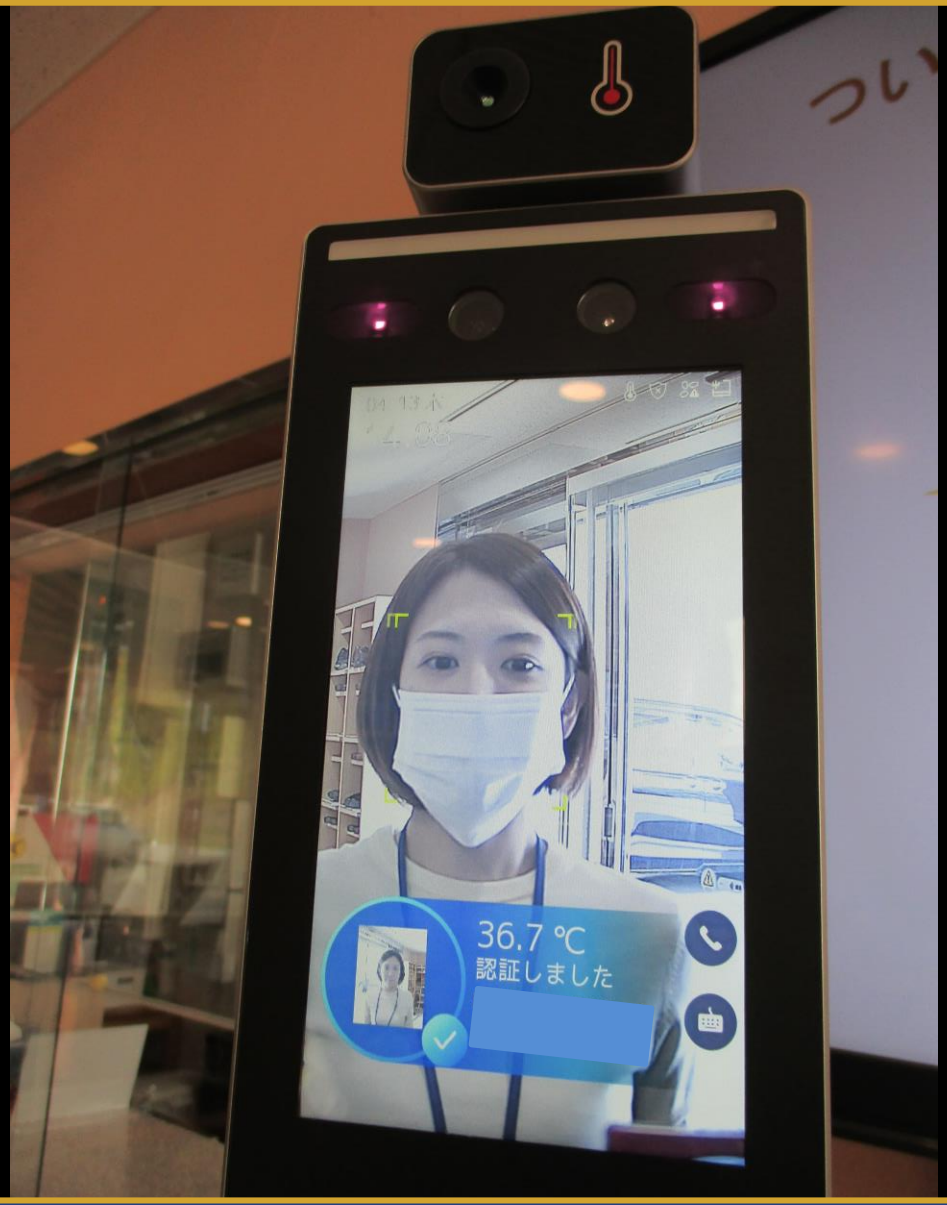


カメラ型見守りセンサー

多機能見守りカメラ

お掃除ロボット

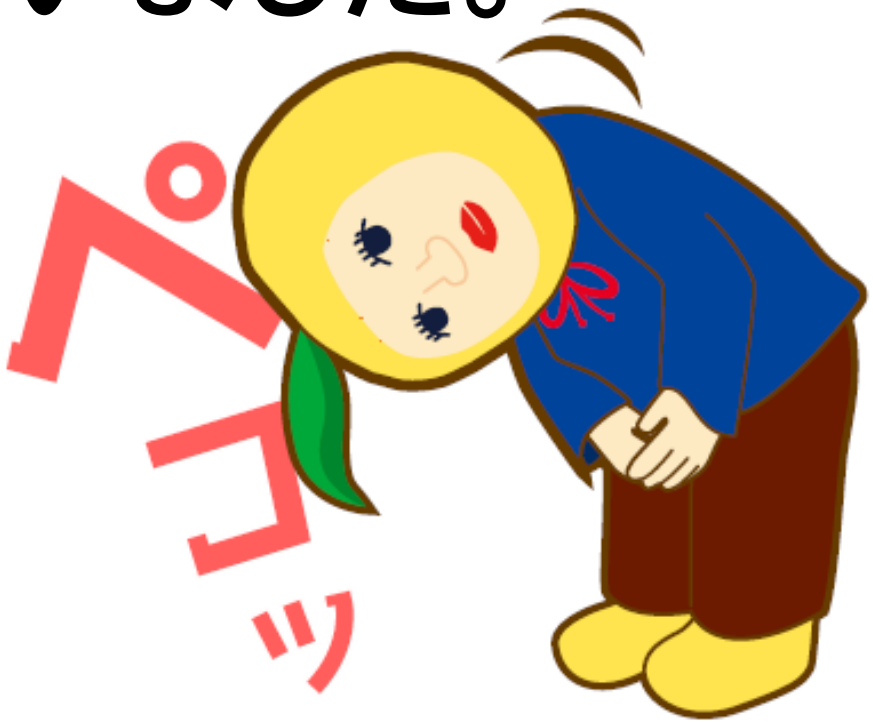
顔認証システム



ICT食材加熱機器

ICT専用食器トレイ

2019年10月8日 国立フエ中央病院
協働事業覚書調印式

ベトナム・フエ介護施設オープン（2023年12月）

ご清聴ありがとうございました。